

# 古川町商店街 (古川町商店街振興組合)

京都府京都市

インバウンド

地域協働

新陳代謝

生産性向上

ポイント

「白川まちづくり会社」「白川まちづくり協議会」との連携で、  
商店街を中心にしたエリア一帯の活性化に挑戦。

## 基本データ

所在地	京都府京都市東山区古川町
人口	約4万人(京都市東山区)
電話/FAX	075-754-8714 / 075-754-8704
URL	http://www.furukawacho.com/index.html
会員数	45名
店舗数	37店舗(小売業21店、飲食業6店、サービス業7店、不動産業1店、医療サービス業1店、その他1店)
商店街の類型	エリア価値向上型
主な客層	主婦、国内観光客/50歳代、20歳代

## 商店街概要

かつての東海道、交通の要点である三条通りに接し、知恩院、八坂神社、清水寺への参道として多くの人々が往来し、「東の錦」「京の東の台所」と呼ばれ古くから繁盛していた地域。昭和25年に古川町朝日会として発足し、一時は南北約300mの通りの中に約50軒もの店舗が立ち並んでいたが、店主の高齢化や後継者不足等により次第に空き店舗が増加していった。平成26年度からは府の支援を受けて民間事業者の力を導入し様々な賑わいづくりの取組を進めており、現在は新規出店や来街者数も増加中。平成29年度にはまちづくり会社を設立し、地域の関係者と連携し地域の課題解決に取り組んでいる。

## 取組の背景

### 商店街だけでなく地域の発展を目指して

古川町商店街では店主の高齢化や後継者不足等により空き店舗が増加して人通りもまばらとなり、商店街単独で活性化の取組を行うことは困難な状況となっていた。しかし、当商店街は、一大観光地である祇園と岡崎の中間に位置し、交通至便だけでなく、「文化」、「教育」、「商業」、「住宅」、「観光」のすべてを兼ね備えたポテンシャルを秘めたエリアであることから、人の流れを誘導することで十分に再生が図れると考えた。

また、商店街の持続的な活性化には地域の人たちとの連携が必要であるとの思いから、地域コミュニティづくりや社会貢献活動、まちづくり協議会へも積極的に関与し、地域と商店街が一体となり、商店街だけでなく周辺エリアのバランスある発展を目指すことを使命として、様々な賑わいづくりの取組を進めることとなった。

## 取組の内容

### 商店街の活動が地域の要として機能

まずは、商店街はエリアの中心地となるべきとの思いから、平成26年に商店街の中ほどに活性化拠点「古川趣蔵」を整備。常勤スタッフを1名配置し観光客へのサービスを提供するほか、商店街の各種会合や地域のイベントスペースとして活用し、コミ

ュニティの場を創出した。

さらに、「古川趣蔵」が商店街情報を収集し、空き店舗と出店希望者とのマッチングの役割を担うことで、平成29年7月までに商店街内に9店舗、周辺地域に2店舗の新規出店がなされた。



古川趣蔵

また、古川町商店街の存在を多くの人に知ってもらうこと、商店街店主に商人魂を思い起こさせることを目的に、広域から来場者を集客する大型イベントを企画。春祭りや秋の収穫祭、クリスマスフェスティバルなどを開催し、飲食店によるワゴン出店や手作り市、ストリートライブなどで商店街を盛り上げた。イベントには商店街の店舗のほか近隣エリアの店舗や京都府内の有名店なども誘致し、回を重ねるごとに来客数が増加した。このイベントの賑わいにより店主の意識にも変化が生まれ、営業時間を延長する、休日にも営業するなどの結果につながった。

大型イベントだけではなく、サマーキッズフェスタやインバウンド向けワークショップなど、地域密着型のイベントや近隣大学との連携事業などにも取

り組んでいる。

さらに、近隣との交流を拡大しつつ、エリアの価値向上と地域住民の満足度の向上を目指して、商店街役員や自治会役員で「白川まちづくり協議会」を発足。商店街だけでなく、地域一体となった取組を実施している。



白川まちづくり協議会

また、府の支援終了後も、こうした取組を継続・発展させていくには、商店街はもとより、自治体、地域住民、支援企業などが一体となって、白川エリアを面として持続的かつ自立的に活性化を図る仕組みが必要であると考え、「(株)白川まちづくり会社」を設立。

まちづくり会社の代表取締役には古川町商店街の理事長が就任しており、資本金の約70%は地元出資となっている。企業活動で得た利益は地元へ再投資することを基本とし、商店街活性化事業や、体験型コンテンツ開発事業、町家ゲストハウス運営事業などを展開している。

## 取組の成果

### まちづくりを考える人・場・機会が増加

白川まちづくり協議会を設立したことで、これまで難しかった「地域」と「商店街」の一体化が実現でき、相互にイベント等に参加したり、ワークショップなどを開催したりするなど、実施事業の検証や地域の問題を話し合う土壌が生まれた。

また、民間事業者の取引先などが積極的にイベント等へ出店し、町おこしや空き家対策に関わっている人、建築家、シェアハウス経営者など様々なプロたちが古川町商店街に集まってくるようになった。高齢化の進む商店街であったが、新規出店も増え、商店街理事会の平均年齢も72歳から64歳へと下がった。さらに、商店街の若手店主で構成する「商店街ビジョン委員会」や「白川まちづくり協議会」の若手が参加する「エリアのミライを考える会」などが新たに誕生。エリアの将来像を考える機会が増えた。また、白川まちづくり会社では、「白川界限ビジョン」を作成し、5年後のこのエリアの在り方を提言している。

## 実施体制

白川まちづくり会社は常勤1名、非常勤役員3名、顧問2名、社員2名で運営しており、社員は両名とも語学が堪能（英語、スペイン語、韓国語）であり、インバウンド対応も行う。情報発信はSNSを中心に各団体と密接な情報交換を行い、3か月に一度、「白川まちづくり会社通信」を発行している。収益としてはゲストハウスの運営や運営受託、まち歩きなどの体験型コンテンツの提供などによって賄っている。さらに地域の高齢者と若者との交流の場として、「ともいき食堂」を定期的開催。ワークショップ（健康体操、コーヒーの入れ方教室など）を組み合わせ、商店街の店舗の総菜などを提供し、お昼のひとときを様々な人と交流できる場を設けている。

白川まちづくり協議会では3か月に1度、「まちづくり協議会だより」を栗田自治連合会域内に全戸配布（約2,200部）しており、地域の人たちに活動を広報している。古川町商店街では、白川まちづくり会社、白川まちづくり協議会と連携し、地域の活性化に取り組んでいる。

## キーパーソンからのコメント



古川町商店街振興組合  
副理事長  
(株)白川まちづくり会社  
副社長 鈴木 淳之

### 大切なのは地域との連携・コミュニケーション

私が古川町商店街に関わり始めてから3年ほどになりますが、まず感じたのはコミュニケーションの大切さでした。商店街の中ほどに「古川趣蔵」を設けて常駐し、店主のみなさんとコミュニケーションを図りながら、地域団体とも連携してイベント企画を重ねていくうちに、商店街のみなさんも、イベントへの協力など、積極的に関わってくれるようになりました。

今では、近隣大学の学生や地域団体との連携も深まり、毎日、誰かが古川趣蔵に立ち寄ってくれています。

### 地域の発展と商店街の繁栄を目指して

今後も、イベントを継続して開催し、古川町商店街のさらなる知名度アップと商店主の意欲向上、新規出店者の獲得を目指します。そして、町衆の文化が色濃く残る古川町商店街及び白川地域の特性を活かし、商店街の店主が持つ職人技を体験していただく講座の開催や、商店街並びに白川エリアのブランド化と商品開発など、白川まちづくり会社や白川まちづくり協議会と協力・連携し、地域と一体となってまち全体の魅力向上に取り組みたいと考えています。